

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 川村 祥平



第75回 全日本中学校長会 研究協議会岩手大会を終えて

岩手県中学校長会 会長 小野寺 哲 男

(盛岡市立仙北中学校校長)

昭和53年以来二度目の全日中岩手大会が、令和6年10月17、18日にトーサイクラシックホール岩手(県民会館)大ホールをメイン会場(他7分科会場)に、大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」、岩手大会スローガン「未来への一步を 共に、黄金の國いわたから」のもと開催されました。新型コロナ禍を経た私たちの誰もが「参集型が当たり前ではないこと」をかみしめ、参集により開催できることに感謝しきりでした。

この大会は、令和以後準備が本格的になったものの新型コロナ禍により、開催可否、方法等の議論に時間を要しました。ただ、昨年度、常任理事等が大分大会に参加後、開催概要、開催要項、運営要項と次第に準備が具体化していき、議論する際には、何のた

めに全国から約1800人の中学校長が集まるのか、また、参加者全員の活躍の場は分科会であること等を確認し、加えて岩手大会で伝えるべきことは何か、大会事務局で何度も議論しました。

県中学校長会が大切にしたことの一つは、144人の会員全員がおもてなしの心で「東日本大震災津波への支援に対する感謝を伝えること」です。本県は約十四年前の大震災以来、国内外から多大な支援を受け、現在も心を寄せていただいております。そこで、全国からの支援のシンボルとして会場の司会台の脇に「全日中支援太鼓」を設置しました。また、開会行事において実行委員長として「いわての復興教育」についてお伝えし、さらに、大震災当時の中学生が、現在二十代後半の大人として活躍しており、まさしく大会主題で示す「新しい時代を切り拓き、より

よい社会を形成している日本人」であるところえ、関係各位に敬意と感謝の意を表しました。

大会は、前日から充実していました。16日は、全日中副会長会、理事会、レセプション。今回のレセプションは「10チーム編成の選抜わんこそば大会」。白熱した和気あいあいの時間でした。17日は、開会行事、文科省説明、全体協議会、分科会。分科会では熱心な議論が繰り広げられました。18日は、矢巾北中学校特設合唱部によるアトラクション、国立天文台水沢VLBI観測所所長・本間希樹氏による記念講演、閉会行事と進みました。

大会を終え、参加者からのアンケート結果に胸をなでおろすとともに歴代の本県中学校長会の先輩方や現会員をはじめ、関係各位に感謝の気持ちでいっぱいです。今後も県中学校長会として、各校において、生徒たちが主体的かつ柔軟に物事に向き合って、多様な見方・考え方により、自らの可能性を発揮して、未来社会を創り出す資質・能力を、共に、育んでまいります。



日本教育会 鷺山会長あいさつ

令和6年度第49回全国教育大会静岡大会報告

(公社) 日本教育会主催の第49回全国教育大会静岡大会は10月12日(土)、静岡市清水テルサで開催されました。今大会では野田村立野田中学校の菊池勉校長が提言を行い、岩手県支部からは4名の会員が出席、7名がオンラインで参加しました。大会参加報告を紹介します。

大会主題「多様性を尊重する態度を育てる教育」

野田村立野田中学校 菊池校長が提言した

野田村の太陽になるうっ太陽プロジェクト

◆開会行事

開会式で鷺山恭彦会長は、本会の特色は、学校や家庭・地域社会が校園種や所属を超えて連携する組織であることに触れ、我が国の教育を牽引するリーダーが一堂に集う静岡大会の開催にあたり、関係機関への謝意を述べられました。

続いて行われた大会趣旨説明では、今大会テーマ「多様性を尊重する態度を育てる教育」について、多様な個人それぞれが生きがいや幸せ、豊かさを感じられる社会の実現に向けて、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓いていく力を身に付けることの重要性について説明されました。また、それらの資質・能力を育むために、リアルとデジタルを融合した授業づくりや、地域等と連携・協働した体験活動の充実など取組の方向性を示しました。



静岡大会の会場の様子

◆各校園種等からの提言

今回、六つの校園種等からの提言を一度に聞きましたが、「学校が地域や社会に直接関わることによる教育の効果」という共通の視点が感じられ興味深かったです。幼稚園と小学校の発表からは、幼保小の連携により、子どもが主体的に自己を発揮しながら学びに向かう姿を大切にする姿勢が感じられました。(中学校については後

継続・深化する復興教育へ

野田村立野田中学校

校長 菊池 勉



平成24年度から地域とともに取り組んできた復興教育の実践・研究を、提言発表として全国の方々に発信する機会をいただけたことに対し、深く感謝申し上げます。

提言では、これまで取り組んできた実践の一端を、ねらいや具体、教育的効果などから発表させていただきました。特に本校の復興教育の集大成「創作太鼓」については、大会主題「多様性」との関わりも含めて発表させていただきました。「古タイヤ」や「竹」なども使い、誰にでも取り組める太鼓、想像力や表現力を発揮しながら自分たちの想いを表現できる太鼓など、本校の創作太鼓の特長や有用性を発表できたことは、とても有意義な機会となりました。

本校の復興教育は、これまでの柱を大切にしながらも「小学校との合同演奏」「逃げ地図の作成」など、継続・深化を続けています。今後も今回発表した成果と課題をしっかりと踏まえながら、「野田村の太陽」を育てることを意識した教育活動を展開していきたいと考えております。今回は、貴重な発表の機会をありがとうございました。



野田中学校 菊池勉校長の提言

述) 高校からは生徒の発案で地域の少年野球チームを指導する取組、特別支援学校からは地域と協働で取り組む花の栽培やワークショップ等の活動費を生徒がクラウドファンディングで募る取組、また地域からは町教委の推進するコミュニティ・スクール事業で中学生を中心とした子どもたちが地域貢献活動としてボランティアに参加するシステムがそれぞれ紹介され、「地域に開かれた教育課程」の具体を学ぶことができました。

◆野田村立野田中学校の提言

菊池勉校長からは、野田中学校で震災以来「野田村の太陽になる

う」を合言葉に取り組まれている「太陽プロジェクト」についての提言がありました。古タイヤや竹を活用した「創作太鼓」は、毎年生徒自身の手で表現を工夫し独自の演奏を作り上げています。また、ハザードマップをもとに生徒が作った「逃げ地図」を活用し、高齢者と一緒の避難訓練を計画しているとのこと。こうした取組を通じて、生徒の自尊感情が高まってきているとの報告に、岩手の「復興教育」の成果が感じられ、誇らしく思いました。

(盛岡市立黒石野中学校

校長 三浦 隆)



菊池校長 スライドによる説明

記念講演「脳科学的に考える『学び』を視聴して

講師 東京大学薬学部教授 池谷 裕二氏

今大会の記念講演を、オンライン視聴しました。講師は、土曜夜の某番組コメンテーターを務め、いつも柔和な表情で適切な論評・所感を述べられる、東大薬学部教授の池谷裕二氏です。氏を検索すると、地元県立高校から東大入学・卒業・大学院入試は全て首席、薬学博士取得の後にコロナピア大客員研究員、その後東大講師、44歳で教授という方でした。しかし、九九や漢字が苦手で、小学生時の成績は並以下だったという逸話は、万人に親近感やら希望を抱かせてくれます。

演題には難解なイメージを持ちましたが、いつものように凡人にも分かりやすく、豊富なスライド・具体例を基に興味深いお話でした。その中から、日常の教育活動や子どもに関わる上で一考・再確認してみたいことを幾つかご紹介します。

◇何世代にもわたる年月の中で、ヒトの脳は「子どもは子どもから学ぶ」ように出来上がっている。従って「よい学校」とは、大人が沢山手を掛けるのではなく、この形態が生きる環境を作ってくれる学校を指す。◇「褒める」よ

り効果が大きいのは「感謝」を伝えること。アドラー心理学「褒める」支配・上下関係、感謝「対等・汎用性大」の提示。ヒトは行動と感情に整合性を求める生き物であり、子どもに大事なことは、まず親や教師が笑顔で先に動くこと。

◇現在の小学生の65%は現在無い職業に就くから、「夢を抱く」とは35%の狭き可能性に自分を閉じ込めること。だから、将来どんな世界が訪れても順応できる柔軟性を磨くこと、適応力「好奇心を大事にしたい。◇AI隆盛の社会だが、AIの使い方、勉強力が極めて重要。楽しんで学ぶことがAIには出来ない。その心を生み出すのは脳で、だからこそ連動する姿勢(行動)・表情は大事。

スライドに、教授室ドアの頭上に論語の「知好楽」を掲げた写真がありました。なるほど、何であれ「楽しむ」ことを本質にしつつ、ポジティブに生き・活動することが、豊かな次代を培うことに繋がるし、またヒトという種がもつ脳構造に抗うことなく生き発展させることなのだと思得しました。

(中村)

地区会だより

北上・和賀地区会

11月23日(土) ホテルシテイプラザ北上において、令和6年度北上・和賀地区会研修会・懇親会を開催いたしました。当日はご来賓をはじめ終身会員や小・中・高の会員等76名の出席がありました。講演の前に幹事会報告を行いました。その後、一関工業高等専門学校長の小林淳哉氏より「学生・生徒が主体となる学びに向けて―一関高専が目指す教育改革―」という演題でご講演をいただきました。

講演では、生成AIを活用した授業研究を中心にお話がありました。近い将来に勤労世代が大きく減り、エンジニアも減る社会が訪れるということです。高専はエンジニアを育成する専門学校であり、授業はエンジニアに必要なスキルである「創造力」「現状突破力」を習慣化する場でなければならぬということです。

これからの教育や学校づくりにおいて、生成AIを活用しながら教育改革を進め、探究させる授業を目指すことの大切さを気づかせていただきました。また、生成A

Iを活用して指導案を作成し、授業で対話的・主体的・創造的な学びの場へつなぐことを、具体的に生成AIの活用例や、生成AIのリスクとの向き合い方と付き合い方を紹介していただきました。小林氏を囲んでの懇親会の席上でも、会員同士が講演内容を話題にしながら、懇親を深めました。(事務局長 門屋 健司)



研修会の様子

第201号の訂正

令和6年10月21日発行の「日本教育岩手第201号」のP6の2段目7行目の鈴木真由美教諭は「佐藤真由美教諭」と、お詫びして訂正します。

一般財団法人 岩手県教育振興基金の公益事業

「公益財団法人岩手育英奨学会へ186万円を助成」

～県内公立小中高校の新任校長・副校長のご協力により～

令和6年10月23日(公財) 岩手育英奨学会」への「育英奨学資金贈呈式」が岩手県庁教育委員室において行われました。

最初に(一財) 岩手県教育振興基金 川村祥平理事長が「今年度も県内公立小中高校の新任校長・副校長からご協力を頂き、助成金を贈呈することが出来ます。経済的な理由で修学が困難な生徒たちのためにご活用ください」と挨拶し、寄付をした新任管理職の方々の名簿を添えて、(公財) 岩手育英奨学会 遠藤洋一会長に寄付金186万円の目録を贈呈しました。

受け取った同奨学会 遠藤洋一会長は「さまざまな家庭事情を抱えている子どもたちのバックアップ体制の一つとして有効に使わせていただきます。多額の温かいお志をいただき深く感謝申し上げます」と御礼の言葉を述べました。

この助成金交付は(一財) 岩手県教育振興基金の公益事業として

2013年から毎年行われ今年で12年目となります。今年度は県内公立小中高校の新任校長・副校長185名から1人1万円のご寄付を頂き、それに教育振興基金からの1万円を加え合計で186万円となったものです。なお、令和6年度は262名が奨学生として高等学校等に在籍し学業に励んでいます。

今後もこの事業を継続してまいりますので新年度、新たに管理職になられた方々からのご協力をよろしくお願いいたします。



東北ブロック連絡協議会 報告

日本教育会の「令和6年度東北ブロック連絡協議会・教育懇談会」は、12月13日（金）、公益社団法人日本教育会専務理事、東北ブロック協議会会長、岩手県支部役員等17名が出席して、サンセール盛岡で開催されました。

日本教育会の活動状況と課題等について、常磐隆専務理事から話題提供があり、福島県小学校長会・小野真教事務局局長（福島市立福島清明小学校校長）から復旧復興に向けた重点的な取組等についての報告がありました。避難先で培われた

「ふるさと愛」と少人数だからこそできる「主体性」「個性を活かす学び」を継承・発展させていくというお話が心に残りました。

続いて、岩手県支部から総会・記念講演会等活動状況の報告、調査研究・研修・子どもの健全育成事業等への助成について報告がありました。

教育実践顕彰で会長賞を受賞する学校が岩手県に多いことや、令和7年8月5日（火）～7日（木）に「学校心理カウンセラー研修講座」が盛岡市で開催されることも話題になりました。

本部及び他県の取組を直接伺い、意見交換ができる貴重な機会となりました。

スポット
その186

近藤健一校長先生は令和5年4月、第二十二代校長として着任されました。先生はヘレンケラー女史が訪れた長い

歴史を持つ本校における勤務は二度目です。現在は岩手県特別支援学校連絡協議会会長、東北地区盲学校長、東北地区の役職を兼任されています。

先生は特別支援学校だけでなく高等学校、岩手県教育委員



会事務局、総合教育センターと幅広く経歴を重ねています。その間、岩手県でもいち早く自立活動教諭の免許を取得、高校勤務時には介護福祉士の免許を取得しています。教育センターでは、一人ひとりの児童生徒を尊重し理解に努めながら相談支援業務に数多く携わられたとうかがっています。現在も多忙な業務を自らのエネルギーに替え、特別支援教育、本校の発展のために尽力されています。校長室には自身の所有する専門書のコーナーを設けており後進の育成にも気を配られています。

（副校長 中村和弘）

岩手教育振興基金

寄附者御芳名

（敬称略）

○終身会員

▼盛岡地区（26名）

松岡聡・佐藤建子・菅野昇
佐藤滋・佐々木秀一・藤村健一
小林智・齋藤齊・三浦裕明
照井正孝・鈴木美成・中屋豊
橋場中士・阿部俊一・紀修
和田英・佐藤均・藤原安生
武田伸一・本田岳雄・菅野亨

佐藤淳・佐々木佳史・須川和紀
村上弘・小澤千殖

▼岩手地区（3名）

佐々木英幸・中崎光則・工藤弘毅

▼紫波地区（3名）

吉田裕晃・佐藤謙司・小田島雄

▼花巻地区（8名）

鈴木俊文・平澤晋・佐々木律夫
瀬川勝司・佐藤敦士・柏木廣喜
本館憲和・木村睦

▼遠野地区（2名）

佐々木美紀・栃内秀茂

▼北上和賀地区（4名）

高橋健・吉田幸哉・千田浩身
高橋亨

▼胆沢地区（2名）

工藤久尚・村上俊明

▼江刺地区（2名）

早川宏昭・関川寛司

▼一関西地区（4名）

小野寺明子・瀧野澤徹・羽柴隆之

小山秀司

▼気仙地区（4名）

佐藤拓巳・菅野美保子・熊谷広克
佐々木康人

▼宮古地区（6名）

片桐啓・佐々木文美・昆野賢寿
三浦政勝・五十嵐善彦・妻田篤

▼九戸地区（2名）

小橋敏・向折戸博昭

▼二戸地区（3名）

富田美奈子・佐々木由貴子
佐藤純子

（69名）

今回は、令和6年3月にご退職され、終身会員としてご加入いただいた小・中・高・特支・教育行政の先生方69名を、加入希望地区会ごとにご紹介いたしました。お一人1万円のご寄附をいただき、深く感謝を申し上げます。温かいお志をお寄せいただき、多額のご支援・ご協力を賜りましたことに衷心より感謝を申し上げます。

会報発送費の

ご協力について（お礼）

令和6年10月に岩手県支部会報発送費の募金に係る協力を終身会員の皆様にお願いたしましたところ、令和7年1月末までに854名の皆様からご協力を賜りました。

誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

飛躍の秘密を探る その4

滝沢市立姥屋敷小中学校

岩手山麓に響くハンドベルの音色

「小規模校の特色ある教育活動」

滝沢市立姥屋敷小中学校 校長 高橋 邦明

はじめに

本校は、小規模完全複式であり小中学校の併設校です。令和6年度の児童生徒数は小学生13名、中学生8名で、子どもたちは皆、明るく元気で活発です。

学区は、滝沢市の中西部、岩手山の麓に位置し標高363Mと高く、戦後に開拓入植され、酪農や農業が盛んで大規模経営も見られます。岩手山麓に広がる自然森林は市の水資源を涵養し、また、春子谷地湿原をはじめ各所に水芭蕉や座禅草群落などがあり、貴重な動植物が生息しています。

学校の歴史

本校は明治8年9月に民家を使用し、寺子屋式学舎を開設したこ



学校の全景

とに始まり、明治38年11月には鶴飼尋常小学校姥屋敷分教室と称しました。大正15年8月校舎新築、昭和28年4月には現在地に校舎が新築移転され、姥屋敷小学校・中学校が設立されました。

ハンドベル活動の紹介

本校の特色ある教育活動であるハンドベル活動について紹介しま

す。ハンドベル活動は旧滝沢村の「特色ある学校づくり事業」（平成10年～18年度）として取り組みを始めました。平成19年度以降は特設クラブとして活動してまいりました。現在も総合的な学習の時間や放課後に練習し、学校文化祭、卒業式、岩手地区中学校総合文化祭で演奏発表を行っています。平成11年10月にはハンドベル演奏で子ども音楽コンクール東北大会優秀賞受賞、平成13年3月には音楽教育振興賞を受賞しています。

ハンドベルの特徴

ハンドベルはどんな楽器か簡単に紹介します。ハンドベルは青銅



イオン盛岡店での演奏



小学生のミュージックベル演奏

製の鐘とその中の振り子、そしてハンドベルで構成されています。奏法には基本的な音の出し方であるリング、細かく振動させるシェイク、ベルを下に置いてクラッパを持ち上げて弾くブラック、リングしたベルを体の後方へ降り下げたり上げたりするスウィングなどがあります。一つのベルは一つの音程の音しか出すことができないので、曲を演奏するには相応のベルが必要になりますし、一人で数個を受け持つことになります。そのため、ベルの奏者は一人ひとり全部が異なる音を受け持つので、演奏には一人も欠けることができません。練習や演奏することで責



文化祭での演奏

・「児童生徒の発表力、表現力を育成する。」
 ・「少人数でも合奏できる喜びを味わわせる。」
 ・「音楽能力を高めるとともに演奏を通して自信をもたせ、日常生活に生かす。」
 子どもたちは、併設校の強みを生かし、小中9年間でハンドベル演奏に誇りと自信を持ち、伝統を引き継ぐと懸命に頑張っています。

本校のハンドベル演奏のねらい

任感、集中力、協調性を養うことができることから教育楽器として注目されています。



地区中文祭での演奏

・ 創成期の本校教職員であった伊藤典子先生から、活動を始めたころの想いを伺いました。なお、伊藤先生は現在も外部講師として指導していただいています。
 ・ 特色ある学校づくりのため、岩手の他の学校では行っていない、小規模校でもできる、小中学生

活動創成期の想い

す。私はいつも子どもたちの演奏を聴くと「心があらわれるような」感覚になります。透き通った清らかな演奏が行われるからです。

演奏活動の記録（抜粋）	
年 月 日	内 容
H10. 7. 10	ハンドベル3オクターブC4-C7購入（100万円相当）
H10. 12. 12	ハンドベル演奏で盛岡地区アンサンブルコンテスト金賞
H11. 9. 23	IBC子ども音楽コンクール岩手県大会優秀賞
H11. 10. 24	こども音楽コンクール東北大会優秀賞
H11. 12. 25	フェザン出逢いの広場のチャリティコンサート
H12. 9. 15	IBC子ども音楽コンクール岩手県大会優秀賞
H12. 10. 29	こども音楽コンクール東北大会優秀賞
H13. 1. 20	アンサンブルコンテスト県大会銀賞
H13. 3. 23	音楽教育振興賞
H13. 11. 11	IBC子ども音楽コンクール東北大会出場
H14. 12. 1	マリオス、盛岡駅周辺イルミネーション点灯式
H15. 3. 7	テレビ岩手「ごきげんテレビ」でハンドベル演奏
H18. 11. 3	イオンモール盛岡のクリスマス点灯式でハンドベル演奏
H18. 12. 9	キャラホールのチャリティコンサートでハンドベル演奏
H22. 12. 19	FMいわてクリスマスコンサート出場
H23. 6. 26	ちやぐちやぐ馬っこ音楽祭（ふるさと交流館）にて演奏
H25. 12. 2	テレビ岩手45周年記念番組出演（生演奏）
H27～現在	岩手地区中文祭でハンドベルの発表

が一緒に活動出来て、みんなが仲良くなれる、そんな活動に取り組みたいと全教職員で考えました。
 ・ 目標は、みんなで調和や協力する気持ちを育てることにしました。
 ・ だれも指導経験がなかったので、東京に講習を受けに行くなど指導者もゼロからのスタートでした。

おわりに

こうした想いが20数年間受け継がれ、親子2代にわたってハンドベルの演奏活動は本校の特色ある教育活動の代表となっています。学校統合まで2年となっていました。が、本校にとってハンドベル活動は宝物になっています。

「みどり輝く いわてまち」

岩手町立川口中学校 校長 三田地 優



本校の特色ある教育活動の一つに地域連携、地域貢献活動がある。研究主任木村義輝教諭を中心に活動を推進しており、以下の内容は木村教諭がまとめたものである。

岩手県岩手郡岩手町。3つの「岩手」が重なる岩手町。「岩手町」の良さや特色は？。本校に着任する前のイメージは「ホッケー」。皆さんにとって岩手町はどんな町でしょうか？

岩手町のまちづくりの目標の一つに、「シビックプライド（地域への愛着・誇り）を醸成すること」がある。これは、町に関わるすべての人が岩手町に誇りを持ち、主体的にまちづくりに関わる人材を育成することを目指すものである。本校でもその目標に向けて、総合的な学習の時間を中心に、たくさんの地域人材・資源を活用しながら、地域の多様な「人・もの・こと」に関わらせる特色ある教育活動を展開している。

らの活動を通して、子どもたちは地域の大人たちと一緒に学び、成長していく。そこで気付いたことがある。岩手町の人はお願いをすれば必ず協力してくださるということだ。しかも、すぐに対応してくださる。親切でスピーディー。岩手町の将来を本気で考えている人がたくさんいる素晴らしい町だ。さて、冒頭の質問、「岩手町の良さや特色は？」と中学3年生に問う。黒板に書ききれないぐらいの考えが出された。それを基に、岩手朝日テレビ主催の「ふるさとCM大賞」へ応募するための15秒の動画を6グループに分かれて作成させた。学習のねらいは、CM作成を通して、岩手町の良さや特色について考えさせ、シビックプライドを醸成させること。CM作成が目的にならないように留意しながら学習を進めた。

ここでも地域の協力が大きな力となった。6グループそれぞれに地域の大人がアドバイザーとして加わり、絵コンテ作成から撮影、編集まで協働して進めた。完成した作品は、町長や副町長、教育長など10名の地域の方々に審査していただき、1作品をふるさとCM大賞に応募した。学習過程や審査

会の講評では、子どもたちをたくさん褒めていただいた。シビックプライドが醸成されるとともに、自己肯定感も大きく高まった。応募した作品は「アイディア賞」(みどり輝く いわてまち)※YouTubeでぜひご覧ください)を受賞し、岩手町としては2019年以来5年ぶりの入賞となった。この結果も、子どもたちにとって大きな自信となった。



第22回ふるさとCM大賞「アイディア賞」授与式

岩手町では人口減少と少子高齢化が急速に進んでいる。今後持続可能な発展を続けるためには、子どもたちが地域の良さや課題に目を向け、主体的にまちづくりに関わっていくことが必要だ。子どもたちが地域の担い手となり、岩手町をさらに盛り上げていくことを心から願っている。



昨年10月に本校の4年生を引率して宮古に被災地見学に行ってきた。田

波遺構のたろう観光ホテルの跡地などを防災ガイドの方から説明を受けながら見学した。震災から3月で14年になるが、現在の小学生は震災後に生まれており、内陸で生まれ育った子どもたちにとっては震災の被害や復興に対して思いをはせるいい経験になったようだ。昨年1月には能登半島沖地震が発生し、大きな被害をもたらした。8月には宮崎県を中心に震度6弱の地震が発生し、南海トラフ地震臨時情報が出されたが、今後30年内の発生確率が80%以上だと言われている。また、近年は気候変動のせいか大雨や洪水など自然災害も増加しており、子どもたちが将来どこで、どんな災害に遭遇するか分からない。▼もしもの場合に備えて、自分の命を自分で守ることができるよう知恵や災害に対する意識をもたせていきたいと考えている。

(盛岡市立羽場小学校)

校長 齋藤 研二